イベントでのリユース食器利用に関する研究
―参加者に対する働きかけに注目して―

環境デザイン学科　山川研究室　岡田真衣

1. 背景と目的

近年、日本では循環型社会の形成が大きな課題とされている。循環型社会形成には、リサイクルよりもリデュース、リユース(2R)を優先して取り組むことが重要である。これまでは、使い捨て社会の帰結点としての大量リサイクルが 2R よりも実施され、“リサイクルしていればエコ”と捉えられがちであった。しかし、今これを見直し、2R を推進する企業や NGO 等の取組[1]が出てきた。

イベントやお祭り(以下、イベント)での環境配慮活動もその取組の１つである。環境配慮活動を実施しているイベントには、地域の地蔵盆や野外音楽イベントなど種々のものがあり、必ずしも環境目的のイベントばかりではない。したがって参加者の中には、環境問題に無関心な人もいる。イベントでの環境配慮活動は、この無関心層に対して環境問題への意識啓発になる可能性がある[2]。現在行われている取組には、ごみ捨て場での分別回収の誘導、リユース食器の利用、環境意識を高めるための啓発活動等が挙げられるが、取組を行ってもそれが参加者の日常生活での環境配慮行動の定着に繋がらなければ、イベントでの取組は一過性のものとして終わってしまう。しかし、これまでの研究[3][4]では、イベント関係者が参加者に何についてどんな手段で働きかけを行っていたのか、その働きかけに対する参加者の受け止め方はどのようなものかについて明らかになっていない。今後イベントでの取組を進めていく上で、働きかける側の意図がその働きかけを受けた参加者の意識・行動にどの程度反映されているかを確認することは重要である。

そこで本研究では、イベントでのリユース食器利用に注目して、イベント参加者に対する働きかけとその評価について明らかにすることを目的とする。本研究では、特にリユース食器の利用・返却や日常生活での2R行動の促進に関する主催者、店舗関係者のアピールについて検討した。

2. 研究方法

調査概要を表１に示す。イベントでリユース食器を貸し出している NPO 団体へのインタビュー調査を基に質問項目を作成し、いくつかのイベントにおいて、参加者に対して質問紙調査を行った。主な質問項目は、店舗からのリユース食器に関する説明の有無、返却の認知、リユース食器利用の感想、リユース食器を使ったイベントへの参加経験、日常生活での変化等である。リユース食器利用の感想と日常生活での変化については記述形式で回答してもらった。

表 1　調査概要

	調査年月日	調査対象	調査方法	調査内容
流木祭	H23.7.22 H23.5.27 H23.7.6	エコプロジェクト 店舗関係者3名 参加者	インタビュー 質問紙調査 インタビュー	食器利用 改善点 食器の感想等
京都学生祭典	H23.12.21 H23.10.9	縁日企画担当 店舗関係者 6店舗 参加者	インタビュー 留置郵送法を用いた質問紙調査 面接法を用いた質問紙調査	導入の経緯 利用の感想 返却の認知、日常への影響等
西京区民ふれあいまつり	H23.12.21 H23.11.19 H23.11.19	ふれあいまつり担当者 店舗関係者 1店舗 参加者	インタビュー 留置郵送法を用いた質問紙調査 面接法を用いた質問紙調査	導入の経緯 利用の感想 返却の認知、日常への影響等
ふれあい“やましな”区民まつり	H23.12.22 H23.11.23 H23.11.23	ふれあいまつり担当者 店舗関係者 6店舗 参加者	インタビュー 主催者を通した留置法による質問紙調査 面接法を用いた質問紙調査	導入の経緯 利用の感想 返却の認知、日常への影響等

また、各イベントの主催者、店舗、参加者への調査結果から参加者に対する働きかけとその評価について図式化し、それぞれのイベントでの取組等を考察した。今回調査対象としたのは、京都府立大学大学祭の流木祭と京都学生祭典、西京区民ふれあいまつり、ふれあい“やましな”区民まつりの４つのイベントである。

3. 調査結果の概要

京都学生祭典、西京区民ふれあいまつり、ふれあい“やましな”区民まつりでの参加者に対する調査の依頼数、回答数、回答率は表２の通りである。流木祭の調査は予備調査であり、対象者が少数であるため掲載していない。

表 2 質問紙回答数・回答率

	依頼数	回答数	回答率
京都学生祭典	114	101	88.6%
西京区民ふれあいまつり	56	40	71.4%
ふれあい“やましな”区民まつり	131	117	89.3%

また、イベントごとに参加者に対する働きかけとその評価について図式したもののうち、京都学生祭典とふれあい“やましな”区民まつりについて、図１と図２に示す。他の２つのイベントについても同様に図式化したが、ここでは紙面の都合で割愛する。

4. 返却場所の認知

今回調査を行なったイベントでは、主催者は参加者に対して、パネル、ポスター等の掲示物やチラシ、パンフレット等の配布物を利用してリユース食器の返却と、その返却場所についてアピールを行なっていた。また、店舗関係者に、参加者へ返却についての声かけを行うよう

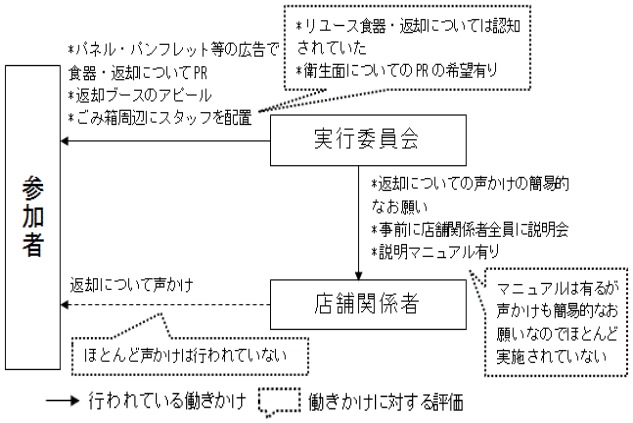

図１　京都学生祭典における参加者に対する働きかけと評価

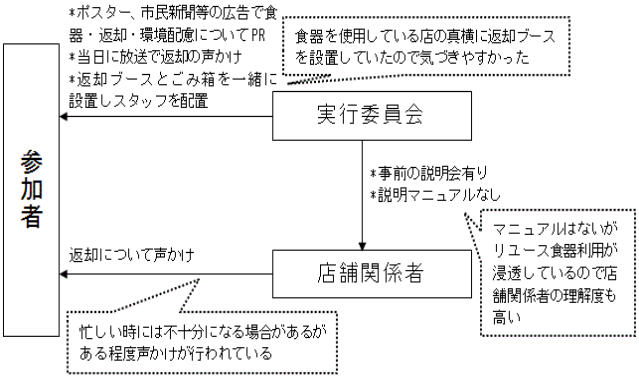

図２　ふれあい“やましな”区民まつりにおける
参加者に対する働きかけと評価

に簡易的に依頼していたが、参加者への調査から、店舗関係者からの声かけはほとんど行われていないことが明らかとなった。声かけの行われていたイベントでも、店舗の忙しい時には声かけが十分に行われていなかった。それにも関わらず、調査を行った参加者のうち85.4%の人が、リユース食器は返却するものということを認識していた。

参加者がそれを認識した手段としては、主催者からのアピールであるポスター等からが 14.0%だった。一方、“返却ブースを見て”、“食器を触ってみて気づいた”など、参加者自身が返却ブースを認識することで、リユース食器をそこに返すべきであるということに気づいた人の割合は、返却を認識していた人の24.2%とポスター等からよりも割合が高かった。このことより、返却ブースは返却の必要性を伝えるための取組としてはある程度成功していると言える。一方で、“返却場所がよくわからなかった”、“言われるまで気づかなかった”等の意見もあった。今後、店舗関係者から参加者への声かけの徹底と、店舗の混雑時に声かけがされなくなるときに、声かけをサポートする工夫が必要であると考える。

5. 日常生活での 2R 行動

今回調査を行ったイベントのうちいくつかでは、リユース食器利用や返却、その目的が環境配慮である等のアピールを、パネル、ポスター等の掲示物やチラシ、パンフレット等の配布物を利用して行っていた。しかしどのイベントにおいても、日常生活での 2R 行動についてのアピールは行われていなかった。主催者への調査でも、参加者の日常生活での 2R 行動促進のためにイベントで何か取組をするという考えは今までなかったということがわかった。それにもかかわらず、これまでにリユース食器を使用しているイベントに参加したことがある参加者の 38.7%の参加者が、日常生活に影響があったと答えていた。そのうち“ごみを減らすように意識するようになった”という意見は 42.9%であった。また、“エコバックを持つようになった”、“詰替の商品を選択するようになった”、“割り箸を断るようにしている”等、参加者が身近で簡単なところから 2R 行動を行おうとしていることも伺えた。このことから、イベントでのリユース食器利用の取組が、2R 行動についてのアピールの有無に関係なく、イベントでのリユース食器利用の目的の１つである“ごみの減量”とリンクした意識啓発に影響していることがわかった。また、イベントで日常生活での 2R 行動についてアピールすることで、より参加者の普段の 2R 行動を促進できるのではないかと考えられた。

6. 結論

本研究では、イベントでのリユース食器利用に注目して、イベント主催者、店舗関係者、参加者に対して調査を行い、参加者に対する働きかけとその評価について検討を行った。その結果、以下の結論が得られた。

・リユース食器返却の認知に関しては、参加者は返却ブースを自身で確認することで、食器は返却するものと認識しており、返却ブースは返却のアピールとしてある程度効果的に機能していた。しかし、店舗関係者からの声かけが徹底されていなかったことも明らかとなり、今後、声かけの徹底と混雑時に声かけが行われなくなるときの対応について工夫が必要であると考えられた。

・日常生活での 2R 行動について、現在はほとんどアピールされていない。しかしそれでも、参加者はごみの減量の意識や、エコバッグの持参等の身近な 2R 行動を行っており、イベントで日常生活での 2R 行動についてアピールすることでより参加者の普段の 2R 行動を促進出来るのではないかと考えられた。

参考文献 [1]羽仁カンタ, ゴミゼロイベントへの挑戦:野外イベントにおける環境対策活動, 廃棄物学会誌10(6), 404-408, 1999/[2]中島悠, ディッシュ・リユース・システムを提唱し、ごみゼロイベントに挑戦, C & G 廃棄物学会誌市民編集 7, 76-77, 2003/[3]佐々木義仁, リユース食器を用いた環境配慮型イベントの提案とその評価に関する研究, 京都大学エネルギー科学研究科エネルギー社会・環境科学専攻修士論文, 2006/[4]大石和人, お祭り・イベントでのごみ減量活動に関する研究～参加者と主催者の意識と行動に注目して～, 京都府立大学人間環境学部環境デザイン学科住環境専攻卒業論文, 2004